

水辺の住人3 「ヒドリガモ」

仁徳天皇陵に至る芦ヶ池水路の水辺に位置する堺高校・・・サイエンス創造科の生徒の水質と水辺の観察報告から、今回は「自然浄化」と季節限定の特別ゲスト「ヒドリガモ」の話を紹介します。

「(堺高生1)「先生、芦が池の水質が良くなりました。それから、池にカモが200匹も来てました！」

「(堺高生2)「カモ200匹もおったか？」

「(堺高生1)「200匹おったよ。僕、数えました。間違いない！」

その後、確認するため芦ヶ池に行くと確かに生徒の報告通り、池の一部ではかなり濁りや濃緑色が薄くなり、水面にはたくさんのカモの群れ（個体数のカウントは生徒の観察報告を信じて、私はカウントしてませんが・・・）がゆったりと泳いでいました。11月になり、気温が下がったため植物プランクトンの活動が鈍ってきたのかもしれない。

「自然浄化」

そもそも気温が上昇し、植物プランクトンが増殖し、水質が緑色になるのは自然の摂理ですから生態系にバランスがとれていたら問題はありません。ただし、人工のため池は構造とともに周辺環境、外来生物の存在などで、自然のバランスが崩れやすいです。水温の上昇とともに水質が富栄養化して緑色で透明度がなくなり、浮遊物質やアオコ、悪臭の発生などが起こることは問題です。芦ヶ池がより多くの水生植物や水生生物が集まる環境に改善・保全され、四季を問わずに透明度ある水質になったら嬉しいですね。

【水辺の博物館】



学名：*Anas penelope*

別名： 緋鳥

分類：カモ目 ヒドリガモ

今回・・・冬の芦ヶ池とカモウオッチングをし、しばらくのんびりと眺めていました。その時、ふと疑問がムクムク・・・

あれ？なんで・・・カモはわざわざ遠い北の地から日本に渡ってくるの？

今回の水辺の住人であるカモは、原則的には冬鳥として渡来します。芦ヶ池のカモは緋色の体色と小さく可愛いフォルムから「ヒドリガモ」と同定しました。北半球のツンドラ地帯から越冬のために南下した渡り鳥です。渡り鳥の多くは、半球睡眠といって半分寝ながら体内内蔵の方位磁針を用いて飛び続け、日本に渡ってきます。その理由は、南はエサが多く、温暖で生きぬくための「エネルギー効率が良い」からです。

そして、冬季からカモの繁殖期にあたる春季までにパートナーを見つけようと出発前の非婚姻色から日本到着後に婚姻色の羽毛へ衣装チェンジし、アピールします。特にオスの婚姻色は額のクリーム色とレンガのような赤色が特徴で、その緋色から「緋鳥」とも呼ばれるなかなかのオシャレさんです。メスは控えめな茶褐色ですが、上品で愛らしい雰囲気です。芦ヶ池を舞台にした着飾ったカモたちの水辺の恋・・・ちょっとロマンティックですね。 (弥)